

工4K-66

川上廣樹著

語學入門

版權所有

敬業社發兌

川上廣樹著

語學入門

版權所有 敬業社發兌

810.7 Ka 811g

語學入門

例言

一 廣樹東京英語學校にて漢文科教授の依頼を受け、該校に出入すること久し、此般別に皇語學の科を設て、これが教授をも亦擔任せり、うれ書生たるもの、漢洋の學を修むるも、語學に通せざれば、其用を爲さず、且外國人すら、我國の語學を修むる者あるに、皇國人にして、この國の語法を知らざるハ、豈愧つべきの至ならずや、これ語學の科を設けし所以なり、さて今此學を講ぜむよ、古今識者の著書も極めて多けれど、互に



皇學會

得失煩簡ありて、一種一部の書に據りて、これが教授を爲しがたし、故に諸書を參酌して、一小冊子を編み、以て語法を曉す捷徑となし、名けて語學入門といふ、一書中言辭學の部に於て、詞を八種に分ちたるハ、西洋語學の法に倣ひ、近時中根淑氏所著の、日本文典に據りて、定めたる所なり、然れども、語釋に至りては、言葉の玉緒、本居宣長著 助字本義一覽、橘守部著 等に多く従へり、また動詞の活用は、詞の八衢、本居春庭著 言靈のしるべ、黒澤翁麻呂著 等に據り、文法學に至りては、紐鏡、本居氏著 詞の玉の緒、助字本義一覽等に據れるなり、

一此書もど大方に示すにあらず、これれ學校に在りて口授の勞にかへ、且生徒質問の資に供せむ料にとて、匆くに筆を執りしことなれば、粗漏も亦多かるべし、ろは後日訂正を加へむとす、

明治廿一年八月

川上廣樹誌

語學入門

下毛 春山川上廣樹 著

夫、人心に思ふことあれば、これを言に出だし、言とは、心の
音の畧語なり、言をのべ續けたるを、詞といふ、則ち言延
の義也、詞を文なして書綴るを、文章といふ、文章に定格
あり、これを文法といふ、その文法を修るには、先、音聲を
正すを以て本となす、故に今其學を別ちて、音聲學、言辭
學、文法學の三種となす、音聲學は、音聲の區別より、假字
遣の事を併せ論じ、言辭學は、言詞に種々の區別ある事
を論じ、文法學は、各種の詞を、綴るべき格を論ぜり、

音聲學第一

音聲學は、まづ五十音の呼法を正すを本となす、音の呼法を正すよは、うの音の出處開合等の區別を、知らざるべからず、音圖を以て示すこと左の如し、

音圖

ア行	アイウエオ	喉音	列列列列	列列列列	列列列列
カ行	カキクケコ	牙音	行	あいうえ	れ
サ行	サシスセソ	齒音	行	かさくけこ	さ
タ行	タチツテト	舌音	行	たちつてと	舌

ナ行	ナニヌネノ	舌音	行	なにぬねの	舌		
ハ行	ハヒフヘホ	唇音	行	はひふへほ	唇		
マ行	マミムメモ	唇音	行	まみむめも	唇		
ヤ行	ヤイユエヨ	喉音	行	やいゆえよ	喉		
ラ行	ラリルレロ	舌音	行	らりるれろ	舌		
ワ行	ワヰウヱヲ	喉音	行	わわうゑを	喉		
開	口啓	口拓	口撮	開	口啓	口拓	口撮

右音圖の縦のくだりを行といひ、横は筋を列といふ、片假字は、漢字の偏旁を省きたるもの、平假字ハ草の體より變ぜしものなり、

音圖のうち、アの一行を母音といひ、其他は皆子音といふ、母音は如何に呼ぶとも、其韻を變ずることなし、カサタナハマヤラワの九行は、これを長く引く時は、其韻皆母音のア行にもどるなり、呼び試みてさどるべし、音圖の字數は、五十個ある故、五十音といへども、ヤ行のイ、ワ行のウは、やはりア行のイウにて、其音は別々變ることなし、されば五十音とはいへど、其實は四十八音なり、ヤワ二行の生ずる義は、下にいふべし、

呼法

ア行の五音は、上にいふ如く、母音あれば、餘の音との異

にして、音韻ともに同聲なり、まづアの呼法は、口を全く開きて、喉より聲を出せば、ア音を生ず、此音はア列カサタナハマヤラワの韻となる、是列を開口音となす、イの呼法は、口を少し開き、喉より聲を發し、唇を押啓く如くすれば、イ音を生ず、則ちキシニヒミリキの韻となる、是列を啓口音となす、口を少し開き始めたる意なり、ウの呼法は、齒を合せ、喉より聲を出せば、ウ音を生ず、此音クスツヌフムユルの韻となる、この列を合口音となす、

エの呼法は、下頤をひらき、押出す音なり、此音ケセテネ
 ヘメエレエの韻となる、この列を拓口音となす、拓は押
 じ開く義なり、
 オの呼法は、窄口スホクをして、喉より發する所の聲なり、此音
 コソトノホモヨロヲの韻となる、この列を撮口音とな
 す、撮口とは、口をすぼめる義なり、
 五音の呼法右の如し、さてアイエオの四音を、すべて開
 口音とすれども、これを細かに別くれば、アハ開口、イは
 啓口、エは拓口、オは撮口となす、ウ音のみは、合口音とな
 すなり、すべて此行を正喉音といふ、

カは、アを呼ぶ聲の首の牙ハシに觸るゝ音なり
 キは、イを呼ぶ聲の首の牙ハシに觸るゝ音なり
 クは、ウを呼ぶ聲の首の牙ハシに觸るゝ音なり
 ケは、エを呼ぶ聲の首の牙ハシに觸るゝ音なり
 コは、オを呼ぶ聲の首の牙ハシに觸るゝ音なり
 此、カ行を牙音といふ
 サは、アを呼ぶ聲の首の前齒ハシに觸るゝ音なり

ソセスシ
 オエウイ

此四音上に准へるべし

此、サ行を齒音といふ、前齒にふれて、舌上を柔かに走る音なり、

タは、アを呼ぶ聲の首を、舌頭にて強く弾く音あり、

ト、テ、ツ、チ、
オ、エ、ウ、イ、
此四音上の例と同じ

此、タ行を舌剛音といふ、

ナは、アを呼ぶ聲の首を、舌頭にて柔かに出す音なり、

ネ、ヌ、ニ、
エ、ウ、イ、
此四音上の例と同じ

ハ、
オ、

此、ナ行を舌柔音といふ

ハは、アを呼ぶ聲を、唇に含みて、柔かに軽く出す音なり

ホ、ヘ、フ、ヒ、
オ、エ、ウ、イ、
此四音上と同例なり

此、ハ行を、唇内の柔音といふ、且此、ハ行はもと柔かなる音故に、詞の首にあれば、ハ、ヒ、フ、ヘ、ホの正音に呼べども、詞の下にありては、正音に呼ぶこと能はず、譬へば、いむ、いひ、いふ、いへ、いほど、如此喉音ヤ、ワの二行に流る

なり、然らざれば、必らず濁音となれり、牙、鳶、藪、壁、壺など
いふ類なり、

マは、アを呼ぶ聲を、強く、唇を敲て出す音なり、

ミ
ム
メ
モ
イ
ウ
エ
オ

此四音上と同例なり

此、マ行を、唇外、剛音といふ

ラハ、アを呼ぶ聲を舌を揺かし出す音なり

リ
ル
ロ
イ
ウ
エ

此四音上と同例なり

ロ
オ

此、ラ行を弄舌音といふ

ヤ行は、文ある喉音よじて、單直の音よあらず、これを拗音といふ、拗とは、折れる義にて、ヤ行は、二音合さりて、拗れ曲る音ゆゑ、拗音といふ、これもとア行のイウより生じたる音なり、ウ音は、萬聲れ起る本源にして、ウより唇を少し開きて、イの音を生ず、これ聲の生ずる順序あり、ウのイウを發音とあして、アイウエオに配し、ヤウの二行を生ずること左のごとし、
イアハヤとなる、
ウアは、ウとなる、

イウは、ユとなる、
 ウイは、キとなる、
 イエは、上となる、
 ウエは、エとなる、
 イオは、ヨとなる、
 ウオは、ヲとなる、
 ヤ行は、自から頭にイ音を冠り、ワ行は頭にウ音を冠り
 たる音なり、ヤ行のイ、ワ行のウは、右拗音母あれば、イイ
 ウウと、二合の音はあらず、音圖は其位置に排置せる
 のみなり、またヤ行の上は、イエの合音なれば、ア行のエ
 と、同字を用ふるは、不都合なり、エの古字に、上と書たる
 例もあれば、今ア行と區別せむために、假に上の字をヤ
 行に用ふるあり

清濁音

ア。イ。ウ。エ。オ。ヤ。イ。ユ。上。ヨ。ワ。キ。ウ。エ。ヲ。此三行の音は、清音
 にて濁ることなし、カ。サ。タ。ハの四行二十音は、濁音に呼
 ぶことあり、アの時は、重點を字傍に加へて、濁音の符と
 なす、ハ行は又半濁音に呼ぶことあり、これは唇を敲キき
 て出す音なり、文字の右肩に一小圈を加へて、半濁の符
 となす、此音の元來正しき聲にあらず、物の形容をなす
 に用ふる語か、または外國より來れる語にあれば、古
 言、雅語には、決して此音なし、ナ行マ行は、もと清音なれ
 ども、實は濁音を兼たるものにて、ナニヌネノは、ダヂツ

デドの濁音の呼法に似て、ナを濁らむとされば、ダとなり、ダを清音に呼ばむとすれば、ナとなる。バ行マ行も此に同じ、されば漢音のバ行は吳音マ行、漢のダ行は吳ナ行なり、男ナム任ニム麼ム美ミの如し、さて皇國の古言には、濁音の首ナムにつく語は決ナムてなし、濁音はみな連聲に出る音のみなり、またララリリルルレレの一行は、皇國の古言に、首につく語のなし、必ずララリリルルの下にありて、詞の活用をなす音なり、

假字用格

萬の詞を文學に移せには、假字の用格を誤りては、其詞の意通ずることなし、故に假字づかひを修るを、第一となす、古は音聲も正しく、假字も誤用することなかりし

あらむ、後世音聲もやく訛り來しに従ひ、假字づかひも、自から誤り多し、うの誤り易き假名は、ワ、ハ、ウ、フ、イ、キ、ヒ、エ、エ、ヘ、オ、ヲ、ホ、シ、ヂ、ズ、等なり、今うれを心得べき捷徑を左に示さむ、

ワの假字

- 沫アワ 沫雪アワユキ 弱ヨク 弱ヨク 鱒イワシ 乾カワ 惶アワシム 響アワズ 烏芋クワシ 理コトワリ 皴シワ 騷サワ 三輪ミリン 腸ハラワタ
- 婦人メノヒト 携タカ 居スル 苞タラ

ワの假字の、語の中下にありて、ハに紛れやすきもの、大略右に載るが如し、此外は、ハの假字と知るべし、

ウの假字

ウの假字を、語の下に遣ふは、音便の假字なり。本語の通
 り言はず、口つゞきよきやうに、なだらかにいふなり、譬へば、
 イヅクニゾを、イツクンゾといひ、イカニを、イカンといふ類
 な。うは高クシテといふを、高ウシテ、低クシテを、低ウシ
 テ、長クシテを、長ウシテ等の類、クイキに通ふ詞は、みな
 ウの假字なり、フと書くべからず

イキの假字

イの假名、語の中下にあるは、
 權 刺腹、カイ 胛、カイガネ 柎、サイジツチ 幸、サイハヒ 埼玉、サイタマ 三枝、サイジツサ 松明、ダイマツ などなり
 キの假字、語の中下にあるは、
 藍、アキ 紫陽花、アザヒサキ 慈姑、クワキ 乞兒、カダキ 紅鳥居、ベニトリキ 殿居、トノキ 參、マキ 基、モトキ 位、イ 莞、ワヅキ

大炊 などなり、

此外、語の中下において、イキの如く聞ゆるは、皆ヒの假
 名なり、又キの上よりつくは

井居、イキ 猪、イノ 藺、イノコ 蝶、イノモリ 田舎、イノカ 堰、イノキ 臂、イノサラヒ 膝行、イノザリ などにて、此
 外は、大概イの假名なり、

エエの假字

エは多く語の上に遣ふ、エを上より遣ふは稀なり、エの上
 なるは、
 繪、エ 此は吳音なり、エ 餌、エ 犬、エヌ 小鳥芋、エツ 笑、エム 醉、エト 雕、エト 屠兒、エトリ 靨、エツボ 槐、エツボ 醜、エツシ 味也

鴨柄カモエ 榮螺ササエ 住吉スミノエ 轆ナガエ 鷄ヌエ 鮓ハエ 肖アエ 稗ヒエ 藁ヒヨクエ 笛フエ 甲キンエ 鴨吃ヒエトリ 吃ドクエ
 エを下に用ふるは、

礎イシズエ 聲コエ 末スエ 梢コズエ 陶スエモノ 杖ツツエ 机ツクム 巴トモエ 故等ユヒ あり、此外エ。エ。の如く聞ゆるは、大概への假名なりと知るべし、

オ。ヲ。の假字

オ。は、必ず上ウヘに用ふる假字なり、ヲ。は、上にも下にも用ふるけれども、多く下シタにありて、後詞ノチノコトにココトは猶下シタとなり、活イカらく假字なり、その上ウヘにあるものは、

雄尾オスビ 緒オ 麻アサ 小男コナリ 女メ 斧ノ 伯父オヤジ 伯母オヤバ 甥ナニ 惜オシム 荻ヨギ 岡オカ
 桶ウケ 長折ナガサ 居イ 處女オトメ 踊オドリ 蛇ヲロチ 拜オガム 犯オカス 治オサム 教オシム 可笑オカシ 幼稚オソナリ

一昨日オトノヒ 女郎花オウゴン 獺オノ 鴛鴦オンドリ 箴オサ 終オハリ 妾オメ 惜オシム 此等の外は、大概オ。の假字也、またヲ。の中下なるは、

丈夫オトコ 婦人メナシ 俳優オウキ 碧海オホミ 郡名オノナ 青アヲ 薰カナル 魚イサ 螟蛉アチムシ 竿オチ 十トナ 氷魚ヒメ
 松蘿マツノカサ 水脉ミヅナ 操ミツナ 葉ハ あどなり、此外下シタにありて、オ。ヲ。の音の如く聞ゆるは、ホ。の假字也と知るべし、

シ。の假字

シ。は濁音なれば、語の上にあることなし、皆下シタにありて、ヂ。の音と紛らはし、されどヂ。は多く、シ。は少なじ、今少なき方を記すべし、

富士山フジヤマ 雉キジ 虹ニジ 羊ヒツジ 蜺シビ 蛆ウジ 項ウナジ 主オノリ 戸主トナリ 貉ムサシ 鏃ヤシリ 脯ホシシ 薑ハシカミ

網代アジロ 簀アジカ 灼然イナシレン 辱カダシケナシ 聾ケシカ 始ハジメ 鱒ウナギ 挫クサツ 辻ツツ 彈ハジク 躑躅ツツ、シ 旋風ツムシカゼ
 眦マナシリ 愁ナメシヒ 憔悴カシケル 佞チシメ 聖ヒシリ 櫺ハシ 眩マシロク 鹿尾菜ヒシキモ 蹂躪フミニシ 同オナジ 交マシハル 短ミジカシ

などの類にて此外は大概デの假名なり
 ズはヅに紛らはじ、されどヅの方は多く、ズは少なし、今ズのかたを載く、
 必カトラズ 雀スズメ 鱸ススキ 鼠ネズミ 鈴スズ 鴟モズ 蚯蚓ミミズ 礎イシズエ 葛クズ 梢コズエ 鑿師ウズメシ 數カズ 疵キズ
 准ナスラフ 黛マユズミ 躑ウズクマル 弭ユハズ 涼スズシ 不覺スツボロ などなり、此他は大概ヅの假字なり、さて右に掲ぐる所を以て假字用格の大畧オモトをさ
 とるべし、

字音假字格

漢字音の假字格は、さして急務にはあらねど、心得置かざればならぬ事故、今は其大畧を示し、事左の如し、詳か
 ことハ、韻鏡を始め、古き韻書類、並に本居宣長の字音假字用格、漢字三音考、及び太田方の漢吳音圖説に就て知るべし、
 但し平韻に就て、誤り易きを耳掲ぐ、

〔東〕 上聲の董去聲のは、音トウ、故に此韻中の字は、コソト
 ノホモロヲの下に、ウ韻を附る也、則ち公聰桐農豊蒙瓏
 翁オウの類是なり、又イキシチリの下に、ウ韻を附る字あり、
 雄弓崇イウ、キウ、シウ、チウ、リウ、中隆これなり、
 〔冬〕鍾トウ 上聲腫去聲のは、冬音トウなれば、東韻と同じ、別に
 宋用同一

鍾の字は音シヨウあり故に此韻に屬する字、ヨ、キ、ヨ、シ、ヨ、チ、ヨ、リ、ヨ、の下に、ウ韻を添るなり、庸胸松重龍の類是なり、

〔江〕 上聲の講去 聲の絳同じ 音カウ故に韻中に屬する字ハ、ア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マ、ラの下に、ウ韻を附るなり、腴腔臆椿瓊邦厖瀧の如し、

〔蕭〕 上聲の篠去 聲の嘯同じ 二字ともに音シヤウ故に此韻中の字、ヤ、キ、ヤ、シ、ヤ、チ、ヤ、ニ、ヤ、ヒ、ヤ、ミ、ヤ、リ、ヤに、ウ韻を附る例なり、遙橋椒朝饒 吳音なり 標苗 吳音なり 聊の類なり、但し此韻中の字、本居氏は、古書の假字に照らして、エウ、ケウ、セ

ウ、テウ、ネウ、ヘウ、メウ、レウ、の假字に定められたれど、今の韻鏡に據りて、前の如く定めたり、

〔肴〕 上聲の巧去 聲の效同じ 音カウ、韻中の字、上の江韻とれなむ、また蕭韻とれなむ、きものあり、これは吳音なり、

〔豪〕 上聲の皓去 聲の號同じ 音カウ、また肴韻にかはる事なし、
〔陽〕 上聲の養去 聲の漾同じ 陽音ヤウ、蕭韻と同じ、唐音タウ、江韻の例とれなし、又別にク、ロ、ウの聲ある字あり、光、晃、恍、廣、曠、荒、皇、惶、惶、惶、惶、惶、惶、簧、簧、簧、簧、簧の類是なり

〔庚〕 上聲の梗去 聲の敬静同じ 庚耕の二字、音カウ、故に江韻の例と同じ、清韻は音明かなれば、解に及ばず、但し此韻の

吳音は陽韻とれふし、ヤウ、キヤウ、シヤウ、ビヤウ、ミヤウ、嬰京精評明の類是なり、また横、觥、礦、宏、閑、轟、嶸の字は庚韻にて、クワウの音也、

〔青〕上聲の廻去 聲の徑同し漢音は明かなり、吳音は上の清韻の例とれなく、

〔蒸〕上聲の拯等去 聲の證隘同し蒸音シヨウ、登音トウなり、上の冬鍾の韻と、全く同じ参考すべし、

〔尤〕上聲の有厚駒去 聲の宥候同し尤幽ともに、音イウ、侯音コウなり、故に此韻中の字、東韻と同じ、

右は字音の誤り易き韻のみをあげし也、支、微、魚、虞、真、文、元等の韻は、其音明白なれば、こゝに畧せり、また入聲の

字は、下にフツクチキの韻を含めり、緝シツ、合カフ、葉エフ、洽カフの如き、皆シウ、カウの如く、聞ゆれども、フの韻とあるべし、此外種々心得へきことあれど、うは字音假字用格等を見て知るべき也、

言辭學第二

此篇は、言詞の區別を論ずるものにて、其品類を分て八種となす、則ち名詞、代名詞、副詞、接續詞、感歎詞、後詞、形容詞、動詞なり、其中後詞と動詞中に收めたる助動詞は、言語文章にれいて、大に必用なるものなれば、其語意を聊か解釋せり、其他の詞品は、大畧を示すのみ、

○名詞

名詞は、總て其物の名目なり、これに普通名詞、固有名詞、無形名詞、單數、複數、男性、女性等の別あり、普通名詞とは、廣く指ていふ名目なり、商人、農夫、鳥獸、山河、などいふ類、固有名詞は、其物に限れる名目なり、源義經、加藤清正、馬ふれば、生月、山なれば、富士山、川には、刀禰川といふ類なり、無形名詞は、形はなけれど、其事理を存したるものにて、則ち春夏秋冬、晝夜、寒暑、また仁、義、禮、智、喜、怒、愛、樂の類すべて是なり、

單數、複數といふは、友人といふ時は、一人にて單數なり、友達といへば、二人以上に通せる詞なれば、複數なり、人々、川々なども同じ、男性といふは、男に限られたる稱にて、天子、親王、君、公、夫、婿、臣、僕の類、女性は、皇后、皇女、内親王、夫人、妻、婦、妾、婢の類をいふ、霞カスミといふは、一の名詞なれども、もと霞カスミま、霞カスミみ、霞カスミむ、霞カスミめと、ま。行四段の活用詞なり、釣ツリも、ラ。行四段の活詞あり、この類極めて多し、もと動詞あるを、言居イヒスて、名詞となせしものなり、

半月を脛ヒムハリスギといひ、三日の月を脛ミカツキといふ、是等は他の詞を集合じて、一の名詞となせるなり、これを集合名詞といふ、大河、高山などいふ類最多し、推て知るべし、

○代名詞

總ての名の代カガに用ふるを、代名詞といふ、己オノの名の代には、吾、私、拙者、小生などいひ、人の名の代には、汝、君、足下、吾子などいふ類あり、また彼、誰、此、其など、皆人及び物の名の代に用ふるなり、

吾、己、汝、彼の類は、元來代名詞に造りし詞なり、臣、僕、君、兄などは、もゞ其人品をいふ稱なれば、代名詞に作りしもの

のにあらず、然れども、吾の處へ僕といへば、代名詞となる、これ等の類を假稱代名詞といふ、

代名詞にも、單複數、男女性の別ある事、名詞とれなし、余は類推をべし、

○副詞

副詞は、動詞の上に置く詞にて、動詞の様子を明かに示すもの也、時としては、他の詞に副ふもあり、

善く。畫がく。雨漸く。霽る。強く。撃つ。深く。掘る。大に。喜ぶ。誠に。樂し。などの類是なり、

語尾を變ぜぬ副詞は、即、各、屢、唯、殆、稍、畧、頗、甚、若、嗚、などの

類なり、元來副詞に造りたる詞なり、
正に東に當れり、といふ時は、名詞に副ひたる也、誠に善
き人なり、といふは、形容詞に副ひたるなり、實に又、とい
ふは、接續詞に副ひたるものなり、此類も亦極て多し、

○接續詞

接續詞は、詞の中間に在りて、文章の前後を、接續する詞
なり、

而。又。且。則。但。猶。將。抑。故。況。加。之。就。中。然。也。の類、皆接
續詞なり、學而して、時に之を習ふ、行く且談ず、君子重か
らざれば、則威あらず、輕煖の體に足らざるか、抑采色の

目と視るに足らざるか、などやうに、文章斷えざるやう
に、接續する語あり、余は准へて知るべし、

○感歎詞

快悅する時、または驚愕する時等に、歎美大息するの聲
を、感歎詞といふ、其言語文章の間に、不意に投げ入るゝ
語なるを以て、間投詞とも名づく、あゝ、あゝ、あゝ、あゝ、れ
い、いで、の類なり、なげきといふは、ながいきの畧にて、か
行四段の活語なり、
あゝ、降たる雪かな、嗚呼盛なる哉、あなたのし、あらこわ
や、れい、痛や、いで、物見せむ、などすべて、是を感歎詞とい

ふなり、

○後詞

名詞、れよび其他の詞に、附加へて種々の意味を示すもの。を後詞といふ。即て「よきは」といふ是なり。譬へば、月を見る、[月の清き]、月に歸る、[月も見し]、月は入にき、[のきの]。もはの類にて、此語なければ、談話文章ともに、自他賓主等の別を、形はず事能はず、故に最も必要の詞にて、其類も極めて繁多なり、今其大畧を左に解釋せむ、

には、主客相對する時、多く客に添ふ語なり、蝶は花に戯むる」といへば、蝶は主にて、花は客なり、其外用法皆此類

なり、

へは、方にて、名詞の下に添ふて、にの心に古くより用ひ來れり、北へ行く雁ぞ鳴なる、雲霽れねども西へゆく、[などの如し、今も某所へ行く、]など常に、にの所に代用せり、

どは、誰と共に爲む、[諸共に哀れとれもへ、]などの類なり、

どは、元來と、まる意のある音なれば、其格も、多く止まりもどるやうなる義に用ふるなり、

どは、清音の用法とれなむく、止まりもどる意あり、元來どもの複語を、單にどと用ふるなれば、いつれもどもの義を含めり、行けど、聞へど、待てど、]の類是なり、

は。は。物。を。切。り。離。つ。意。の。音。な。り。依。て。其。語。辭。も。皆。切。り。分。つ。意。あ。り。秋。は。來。に。け。り。』と。い。へ。ば。夏。に。分。ち。言。ふ。辭。今。日。は。暑。し。』と。い。へ。ば。昨。日。ま。で。は。涼。し。か。り。し。や。う。に。聞。ゆ。る。類。也。且。は。文。字。の。上。に。あ。る。語。ハ。必。ら。ず。其。文。中。の。主。た。る。もの。な。り。

ば。ハ。物。を。切。り。分。つ。意。ハ。ば。と。同。し。さ。れ。ど。動。詞。に。添。ふ。詞。に。て。過。去。と。未。來。の。差。別。あ。り。花。さ。け。ば。』花。ち。れ。ば。』月。出。れ。ば。』月。入。れ。ば。』な。ど。い。ふ。は。過。去。の。語。と。な。る。花。さ。か。ば。』花。ち。ら。ば。』月。い。で。ば。』月。入。ら。ば。』と。い。ふ。時。ハ。未。來。の。語。と。な。る。此。等。の。別。を。心。得。べ。し。

き。ハ。名。詞。動。詞。に。添。ふ。語。に。て。に。と。同。く。文。中。の。客。語。に。添。ふ。て。用。を。な。す。もの。な。り。月。を。翫。ふ。』花。を。看。る。』と。い。ふ。と。き。は。其。翫。ひ。見。る。人。が。主。に。て。月。と。花。と。ハ。客。な。り。ま。た。一。種。もの。き。と。い。ふ。意。を。含。め。る。を。あ。り。夏。の。夜。は。ま。だ。宵。な。が。ら。明。ぬ。る。を。』き。の。ふ。け。ふ。と。ハ。思。ハ。ざ。り。し。を。』の。類。な。り。又。ハ。通。ふ。を。あ。り。花。の。色。を。雪。に。ま。じ。り。て。見。え。ず。と。も。香。を。だ。に。匂。へ。人。の。あ。る。べ。く。』の。類。な。り。

が。ハ。の。と。れ。ぬ。し。萩。が。花。』君。が。代。』淺。茅。が。原。』見。る。が。う。ち。に。』な。ど。の。如。く。尙。下。に。い。ふ。べ。し。

の。ハ。前。の。が。と。れ。な。じ。く。通。じ。用。ふ。萬。葉。の。時。代。ハ。常。に。の。

といふ所を多くがといへり、古今集以下の歌には、大概
 各詞の下にはの動詞の下にのがを用ひしが如し、花の
 香、月の影、寝るがうちに、見るがうちに、などの類なり、然
 れど君が代、淺芽の原、梅が香などは、今古ともにがとい
 ひならへり、
 よりハ二箇の用法あり、一は東より、西より、南より、北よ
 りと用ふる類にて、これの意也、此のからは、吹か
 などの、からとの異なり、吹からは、然るからの
 からは、故と同一詞にて、接續詞の部あり、 また一は、常よ
 りも、春べになれば、櫻川、などいふ類、これは常の時と春
 と、比較したる詞となれり、

だに、だも、ずら、さへ、此四種の語意、最紛らはし、今其差別
 を畧解せむ、だには、もと事の關たる時の辭にて、及ばぬ
 までも、なしてだに見むと云意のある語なれば、だに、此
 上に、せめてといふ意を含めるが多し、だもは、全くだに
 とれぬを辭にて、だにもの畧なり、その用ひざまは、俗に
 でもといふ意が多し、をらは、ひたをらの上畧なるべし、
 ひたすらは、うのまくと云に通ひ、うのまくは、なほと云
 意に通へば、萬葉などには、すらに尙の字を用ひたり、や
 つは、り尙といふ意と心得べし、さへは、其上の義にて、萬
 葉に副の字を填たり、副とは、彼事のある上に、又此事の

副加はれるを云ふ、梓弓、れしてはる雨、けふふりぬ(其上三)あす
 ざへふらば、云々といふ類なり、
 うは、春日野は、けふは勿燒う(ナ)あるむなじとて、春勿忘う(ナ)、
 などの如く、なの動詞を冠らしめて、禁止の詞とせり、又
 勿の詞なくして用ふることもあり、
 ぞは、鹿ぞ鳴なる、戀ぞつもりて、淵となりぬる、などの如
 く、強くゐくる詞なり、また各のりをあつく、行くは誰が
 子ぞ、(ナ)など語の下に用ふるもあり、
 などは、あれなど、これなどと、數多く並べいふ時の詞な
 り、なんどといふもれなじ、

右後詞に屬せる分の、れほよろを出せるなり、

○形容詞

形容詞は、事物の大小長短淺深美惡等の様を、形狀する
 詞なれば、名詞または、代名詞の上、或は下に置くなり、
 形容詞の類は、高き山、深き川、賢き人、香はしき花、明なる
 月、渺茫たる海、峨々たる山、人心騷然たり、風蕭々として、
 などの類にて、枚擧に違あらず、
 百軒長屋、百畝之田、爰を去ること一里許、などの數語も、
 其數を示し形容詞なり、一より萬億に至るまで、皆是な
 り、數多の鳥、僅かなる錢、などもれなじことなり、

御代、御殿、御刀などの御は、尊敬を示す形容詞なり、貴札、尊書などもまた同じ、

○動詞

動詞は、すべての活語にて、最廣き詞なり、且使用の種類も多けれど、我が語學にありては、れしなべて、一様の活語と見なして可なり、
動詞は、働きをなす詞なれば、語末の種々に活用するものなり、四段、一段、中二段、下二段の四種の活法あり、四段の活用とは、五十音の第一音より、第四音までに活くをいふ、但此活用はあやわの三行にはなし、

四段活用

未
來
去
過
在
現
下
知

書

けくきか

戴

けくきか

急

けくきか

抱

けくきか

彈

けくきか

乾

けくきか

行

けくきか

飽

けくきか

動

けくきか

働

けくきか

欺

けくきか

解

けくきか

築

けくきか

聞

けくきか

押

せすしさ

餘

せすしさ

借

せすしさ

寄

せすしさ

申

せすしさ

出

せすしさ

犯

せすしさ

勝

てつちた

保

てつちた

立

てつちた

隔

てつちた

打

てつちた

待

てつちた

勇 <small>イサ</small> めむみま	習 <small>ナラ</small> へふひは	拂 <small>ハラ</small> へふひは	言 <small>イ</small> へふひは	往 <small>イ</small> ねぬにな
住 <small>ス</small> めむみま	敬 <small>ヤマ</small> へふひは	香 <small>ニホ</small> へふひは	逢 <small>ア</small> へふひは	死 <small>シ</small> ねぬにな
忌 <small>イ</small> めむみま	揃 <small>ソロ</small> へふひは	問 <small>ト</small> へふひは	思 <small>オモ</small> へふひは	
挑 <small>イド</small> めむみま	遊 <small>アソ</small> べふびば	笑 <small>ワラ</small> へふひは	息 <small>イコ</small> へふひは	
育 <small>ハゴ</small> めむみま	呼 <small>ヨ</small> べふびば	通 <small>カヨ</small> へふひは	疑 <small>ウタガ</small> へふひは	
惡 <small>ニク</small> めむみま	撰 <small>エラ</small> べふびば	煩 <small>ワツラ</small> へふひは	厭 <small>イト</small> へふひは	
	一段ま此 りに行濁 通四音	粧 <small>ヨウ</small> へふひは	祝 <small>イハ</small> へふひは	

大概右のごとく、餘ハ推テ知るべし、

一段活用

破 <small>ヤブ</small> れるりら	憚 <small>ハバカ</small> れるりら	語 <small>カタ</small> れるりら	染 <small>ソム</small> めむみま
練 <small>ネ</small> れるりら	取 <small>トル</small> れるりら	釣 <small>ツク</small> れるりら	摘 <small>ツク</small> めむみま
撰 <small>エ</small> れるりら	讓 <small>ユツ</small> れるりら	怒 <small>イカ</small> れるりら	挾 <small>ハサ</small> めむみま
賣 <small>ウツ</small> れるりら	堀 <small>ホ</small> れるりら	至 <small>イタ</small> れるりら	止 <small>ヤ</small> めむみま
居 <small>イラ</small> れるりら	遣 <small>ヤ</small> れるりら	交 <small>マシ</small> れるりら	拒 <small>コバ</small> めむみま
下 <small>ゲ</small> れるりら	降 <small>フ</small> れるりら	禱 <small>イナ</small> れるりら	富 <small>ト</small> めむみま
上 <small>ノ</small> れるりら	振 <small>フ</small> れるりら	偽 <small>イツ</small> れるりら	

これの第二九音一段にて活くをいふ此活は阿さたら
此四行にハナシ、

射	干	着
るれ	るれ	るれ
居	噴	似
るれ	るれ	るれ
	見	養
	るれ	るれ

中二段の活用

これは第二第三の音にて活くをいふなり此活はあさ
な。三行にはなし、

起
落
綴
閉
攀
恥

戀
用
醉
生
愁

浴

老

舊

率

報

懲

悔

下

下二段の活用

これは第三第四の音にて活くをいふ此活は十行こと
づくあり、

得

崩 <small>ツク</small> えゆ	消 <small>ホ</small> えゆ	譽 <small>ホ</small> めむ	辨 <small>ワキマ</small> へふ	兼 <small>カ</small> ねぬ	捨 <small>ス</small> てつ	瘦 <small>ヤ</small> せす	受 <small>ウ</small> けく
冴 <small>サ</small> えゆ	愈 <small>イ</small> えゆ	諫 <small>イサ</small> めむ	堪 <small>タ</small> へふ	委 <small>ユダ</small> ねぬ	企 <small>キ</small> てつ	失 <small>シ</small> せす	設 <small>セツ</small> けく
肥 <small>コ</small> えゆ	越 <small>コ</small> えゆ	改 <small>アラタ</small> めむ	與 <small>ユ</small> へふ	連 <small>ツラ</small> ねぬ	撫 <small>ナ</small> でつ	載 <small>サイ</small> せす	舉 <small>ア</small> げく
燃 <small>モ</small> えゆ	費 <small>ツヒ</small> えゆ	止 <small>ト</small> めむ	答 <small>コタ</small> へふ	重 <small>カサ</small> ねぬ	當 <small>ア</small> てつ	馳 <small>チ</small> せす	預 <small>ヨ</small> けく
榮 <small>サカ</small> えゆ	煮 <small>ユ</small> えゆ	集 <small>アツ</small> めむ	考 <small>カムガ</small> へふ	尋 <small>タツ</small> ねぬ	惶急 <small>ア</small> てつ	懸 <small>カ</small> けく	助 <small>タス</small> けく
聞 <small>キク</small> えゆ	吠 <small>ホ</small> えゆ	誠 <small>マコト</small> めむ	代 <small>カ</small> へふ				
見 <small>ミ</small> えゆ	絶 <small>タツ</small> えゆ						

枯 <small>カ</small> れる	倒 <small>タ</small> れる	崩 <small>ツク</small> れる	晴 <small>ハル</small> れる
飢 <small>ウ</small> ゑう	植 <small>ウ</small> ゑう	居 <small>ウ</small> ゑう	

右はうの大畧を擧ぐるのみ、餘は類推すべし、助動詞は、動詞の下に添加へて、動詞の意味を通ぜしむる語なり、則けり、ける、けれ、き、し、ゑ、か、ぬ、ぬる、ぬれ、つ、つる、づれ、等の類にて、過去、現在、未來の區別は、此詞によりて知るくなり、左に其大畧を解釋す、けり、ける、けれ、けりは元來來の言の活きたる語にて、其事の落着治定したるを云、辭なり、故に過去に属す、咲

けり。待。けり。の如し。又にて。等の言を添て。咲。けり。咲て。けり。とつかふ時もあり。よ。けり。は。往。來。て。けり。は。竟。來。の意なり。又なり。けり。たり。けり。と遣ふことあり。此は複用法なり。ける。けれも。皆。けり。の活用したるなれば。意は變ることなし。

き。し。か。き。は。既。の義なり。あり。き。は。在。既。見。き。は。見。既。の意にて。在。は。て。見。は。て。といふが如し。去。は。去。の義にて。さ。りの反。聞。し。は。聞。去。見。し。は。見。去。の意なり。し。か。は。し。に。か。を。ろ。へ。て。殘。る。意。を。含。め。た。る。な。り。共。に。過。去。の。詞。に。屬。せり。

ぬ。ぬ。る。ぬ。れ。ぬ。は。畢。の。ぬ。にて。往。の。義。也。なり。ぬ。なり。ぬ。る。なり。ぬ。れ。などのぬ。よ。て。過。去。に。屬。す。

つ。づ。る。づ。れ。つ。は。竟。の。義。也。見。つ。は。見。竟。聞。つ。は。聞。竟。て。づ。る。づ。れ。な。じ。く。過。去。に。屬。す。

た。り。た。る。た。れ。た。り。は。而。有。の。約。れ。る。よ。て。得。た。り。は。得。而。有。の。義。也。た。る。た。れ。な。じ。く。過。去。に。屬。す。

な。り。な。る。な。れ。な。り。は。爾。在。の。義。也。な。る。な。れ。も。れ。な。じ。共。に。現。在。の。詞。な。り。

つ。く。は。現。在。の。詞。な。り。一。つ。二。つ。な。ど。の。つ。よ。て。物。を。ひ。と。つ。く。數。へ。立。る。意。よ。り。い。ふ。語。な。り。依。り。て。露。に。ぬ。れ。つ。

くは露にぬれつく、雪はふりつくは雪はふりつく
 と、其事を數へあげていふ也。つくはたゞにながらの意
 と而已、心得るは非也。
 り、るれは入、入、入の上畧なり、ありは有入、まわりは参入
 の義にて、現在の詞なり、
 むめ、「むは聞かむ、言はむ」のむにて、萬葉集には將、聞、將
 言とかけり、此にて其義を知るべし、めはむの轉じたる
 語と心得たるは非なり、めには、べけれといふ意を含め
 り、さてむめ、どもに未來の詞に屬せり、
 なむ、なめ、「なむの語」二義あり、暮なむ、出なむなどは、

將、暮往、將、出往の義、また一つは願ひのなむあり、これは
 なもといへるが古語にて、歎マアと歎き願ふ意を含め
 り、なめも前とれなく、共に未來の詞なり、
 めり、め、め、め、「めりはべら」と同語にて、邊の義なり、海
 邊、川の邊と云が如し、殆と云語も邊々の意なれば、字
 書に殆、危也、近也、邊也と注せり、されば流るめりは流る
 邊に近きたるなり、散りぬめりは散る邊に近きたる
 也、め、め、めも活用にて、異なることなど、共に未來の詞
 なり、
 まじ、まじか、「いはまじ、聞かまじ」などいふなり、これは

むとびの意にていはむとす、聞のむとすの義と心得べし。まじかは將爲べけれの約れるなり、共は未來の語なり、
 らむ、らめ、らし、共に未來を推量して、疑ふ意を含める詞なり、
 ならむ、ぬらむ、ぬらめ、づらむ、づらめ、けむ、けめ、けらし、此詞は、少じつこの差別はあれど、皆未來を推量する所に用ふるなり、
 以上上の概畧を示す古來語學の書に此類の辭を受辭といへり

文法學第三

文法は、文章を綴る語法なり、文章は種々の語を綴りかして種々の情意を述るものあれば、其法を得ざるときは、其意味を通徹しがたじ、依て起語起語辭、結語結語辭、受るの格を、よく會得すべし、たとへば、月はと起せば、清しと結び、月ぞといへば、清きと受け、月こそといへば、清けれと留るの類なり、
 起語に八箇の定格あり、は、も、徒、ぞ、の、や、何、ころ、是なり、此中に、徒とは、は、も、ぞ、の、等の後詞を假らず、獨自其意味を起すものなれば、假に徒と名く、即獨立格あり、何とは、な

ど。な。ど。い。か。に。い。か。で。等の類にて、即疑問格なり、
起結語格の圖

起	はも徒	結一	志 <small>善深</small>	全二	志 <small>嬉戀</small>	全三	き <small>見聞</small>	全四	にき <small>散りにき 歸りにき</small>	全五	てき <small>言ひてき 思ひてき</small>
そのや何	き <small>善深</small>	志 <small>嬉戀</small>	志 <small>見聞</small>	に志 <small>散りに 歸りに</small>	て志 <small>言ひて 思ひて</small>	こそ	乃れ <small>善深</small>	乃れ <small>嬉戀</small>	志 <small>見聞</small>		

全六	ず <small>有らず 言はず</small>	全七	る <small>在り 居り</small>	全八	せり <small>冬籠せり 紅葉せり</small>	全九	あり <small>言ふなり 鳴くなり</small>	全十	たり <small>任せたり 浮きたり</small>	全十一	けり <small>咲けり 待けり</small>	全十二	めり <small>散ぬめり 往ぬめり</small>	全十三	けり <small>咲けり 書けり</small>
ぬ <small>有らぬ 言はぬ</small>	る <small>在る 居る</small>	せる <small>冬籠せる 紅葉せる</small>	ある <small>言ふなる 鳴くなる</small>	たる <small>任せたる 浮きたる</small>	ける <small>咲ける 待ける</small>	める <small>散ぬめる 往ぬめる</small>	ける <small>咲ける 書ける</small>								
ね <small>有らね 言はね</small>	れ <small>在れ 居れ</small>	せれ <small>冬籠せれ 紅葉せれ</small>	あれ <small>言ふなれ 鳴くなれ</small>	とれ <small>任せたれ 浮きたれ</small>	けれ <small>咲けれ 待けれ</small>	めれ <small>散ぬめれ 往ぬめれ</small>	けれ <small>咲けれ 書けれ</small>								

全十四	せり 為せり 残せり これハすの轉用也
全十五	てり 立てり 待てり これハつの轉用也
全十六	へり 言へり 思へり これハふの轉用也
全十七	めり 澄めり 萎めり これハ心の轉用也
全十八	れり 積れり 散れり これハるの轉用也
全十九	ぬり 成りぬり 知りぬり

せる	為せる 残せる
てる	立てる 待てる
へる	言へる 思へる
める	澄める 萎める
れる	積れる 散れる
ぬる	成りぬる 知りぬる

せれ	為せれ 残せれ
てれ	立てれ 待てれ
へれ	言へれ 思へれ
めれ	澄めれ 萎めれ
れれ	積れれ 散れれ
ぬれ	成りぬれ 知りぬれ

全二十	つ 言ひつ 見つ
全二十一	得 ^ス 來 ^ク 爲 ^ス 寢 ^ス 經 ^ル
全二十二	ま 着 思はず
全二十三	る 知らる 言ハる
全二十四	く 舉 手向く
全二十五	ま 任 寄す
全二十六	つ 立つ 出つ

つる	言ひつる 見つる
る	為る 寢る 來る 得る 經る
ま	着する 思ハする
る	知らる 言ハる
くる	舉ぐる 手向くる
ま	任する 寄する
つる	立つる 出つる

つれ	言ひつれ 見つれ
れ	寢れ 來れ 為れ 得れ 經れ
ま	着れ 思はずれ
る	知らる 言ハる
くれ	舉ぐれ 手向ぐれ
ま	任すれ 寄すれ
つれ	立つれ 出つれ

全二十七
全二十八
全二十九
全三十
全三十一
全三十二
全三十三
全三十四

せ	く	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ
殘成	行聞	居植	時流	聞見	染眺	戀添	尋重
すす	くく	うう	るる	ゆゆ	むむ	ふふ	ぬぬ

う	る	ゆ	む	ふ	ぬ
居植	時流	聞見	染眺	戀添	尋重
うる	るる	ゆる	むる	ふる	ぬる

せ	け	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ
殘成	行聞	居植	時流	聞見	染眺	戀添	尋重
せせ	けけ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ

全三十五
全三十六
全三十七
全三十八
全三十九
全四十
全四十一
全四十二

つ	ふ	む	る	む	ら	け	あ
待立	思言	包汲	知見	聞見	成	有	行
つつ	ふふ	むむ	るる	むむ	らら	けけ	なな

て	へ	め	れ	め	ら	け	あ
待立	思言	包汲	知見	聞見	成	有	行
てて	へへ	めめ	れれ	めめ	らら	けけ	なな

全四十三

てむ〔摘みてむ〕
折りてむ

てめ〔摘みてめ〕
折りてめ

右は本居氏の紐鏡一據りて掲げつ此外一ま一し一は一も、徒一ぞ一や一何一等の結語ま一し一は一こ一う一の結語ら一し一け一ら一し一は一總ての結語つ一く一かな一は一は一も一徒一の結語なり

起結用例

としのうち一春は一き一けり一云一 古今集

春は梅一鶯一つ一と一や一藤一山一ぶ一き一櫻一の一さ一す一宮人一は一花一

こ一ろ一う一つ一せり一 〔箏唄〕
の曲

これはは一の指辭〔オシゴトバシ〕二一つ一あれ一ど一重一き一か一た一を一受一る一なり、

徳は本一なり一財は未一なり一 〔大〕
學

黎民も亦一日一は一殆一い一かな一 〔全〕

龍田川もみぢ亂れて流る一めり一 〔古今集〕

これは所謂徒の結にて、獨立格なり、

皆上下〔カミシモ〕の人一も一い一ふ一めり一 〔後撰集〕

以上はも、徒の起結なり

やまと歌は、ひとつ心をたねとして、萬の言の葉とぞ、なれりける、 〔古今序〕

あしたの原は、けふぞ焼くめる、 〔拾遺集〕

雲井にひ一く一なる一神も、れ一つ一れば一落一る一世一の一なら一ひ一、さ一り
とてハ我戀の、な一ど一あ一は一かな一は一さ一る一べき、 〔箏唄雲井曲〕

春たつけふの風や解くらむ古今集

七せきれ屏風もれどらばなどか越えざらむ羅綾のた

もともひかばなどかきれざらむ箏唄落

榮江ことぶく梅が風いく世れ春や匂ふらむ清元梅の春

がてむの行かぬ鶏の聲をさいぞあらむと見まはして

常磐津 關の戸

以上ぞのや何の起結なり

色よりも香ころあはれとれもほゆれ古今集

鶴ころむれおてあろぶめれ今様

月見ればちよものころかなしけれ古今集

人こそ知らぬかわくまもなし千載集

ひるは消つくものをころれも詞花集

以上ころの起結なり

右は雅俗を撰ばず思ひ出でしまゝを記してその大凡を示すものなり

語學入門終

語學入門

明治廿一年十一月十九日印刷
明治廿一年十一月廿四日出版

著述者

栃木縣士族

川上廣樹

東京赤坂區赤坂新町
三丁目四十二番地

福井縣平民

柳原新一郎

東京府神田區裏神保町
一番地

滋賀縣士族

熊田宜遜

東京府神田區松下町
十三番地



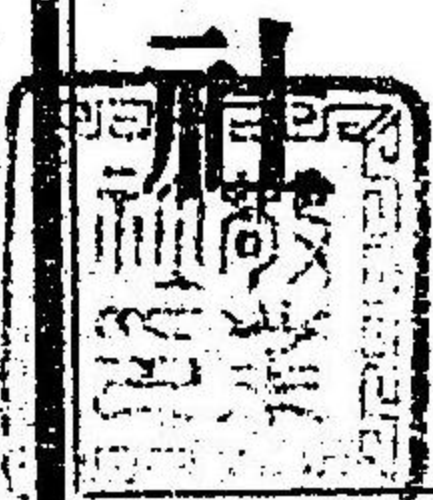
發行者

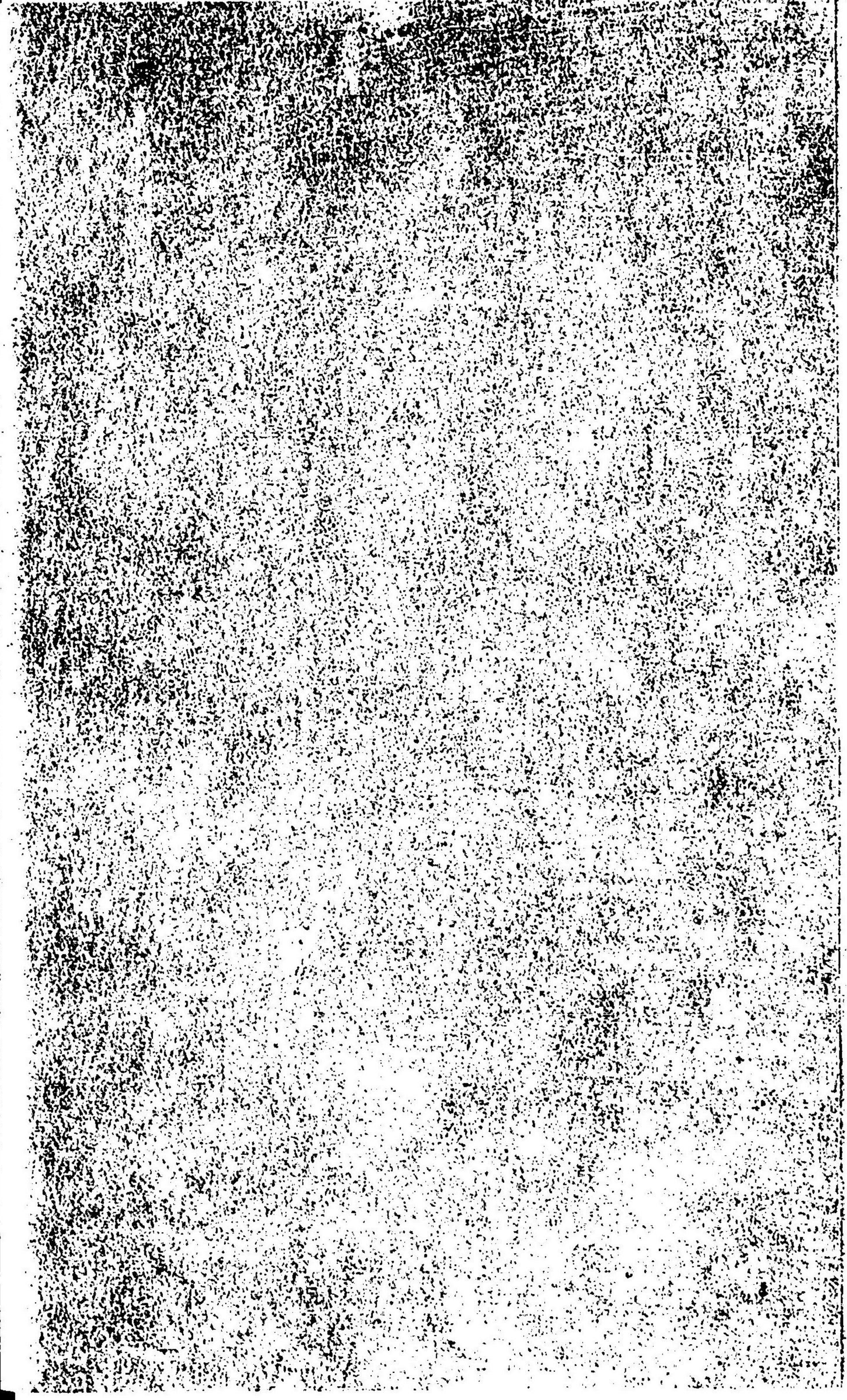
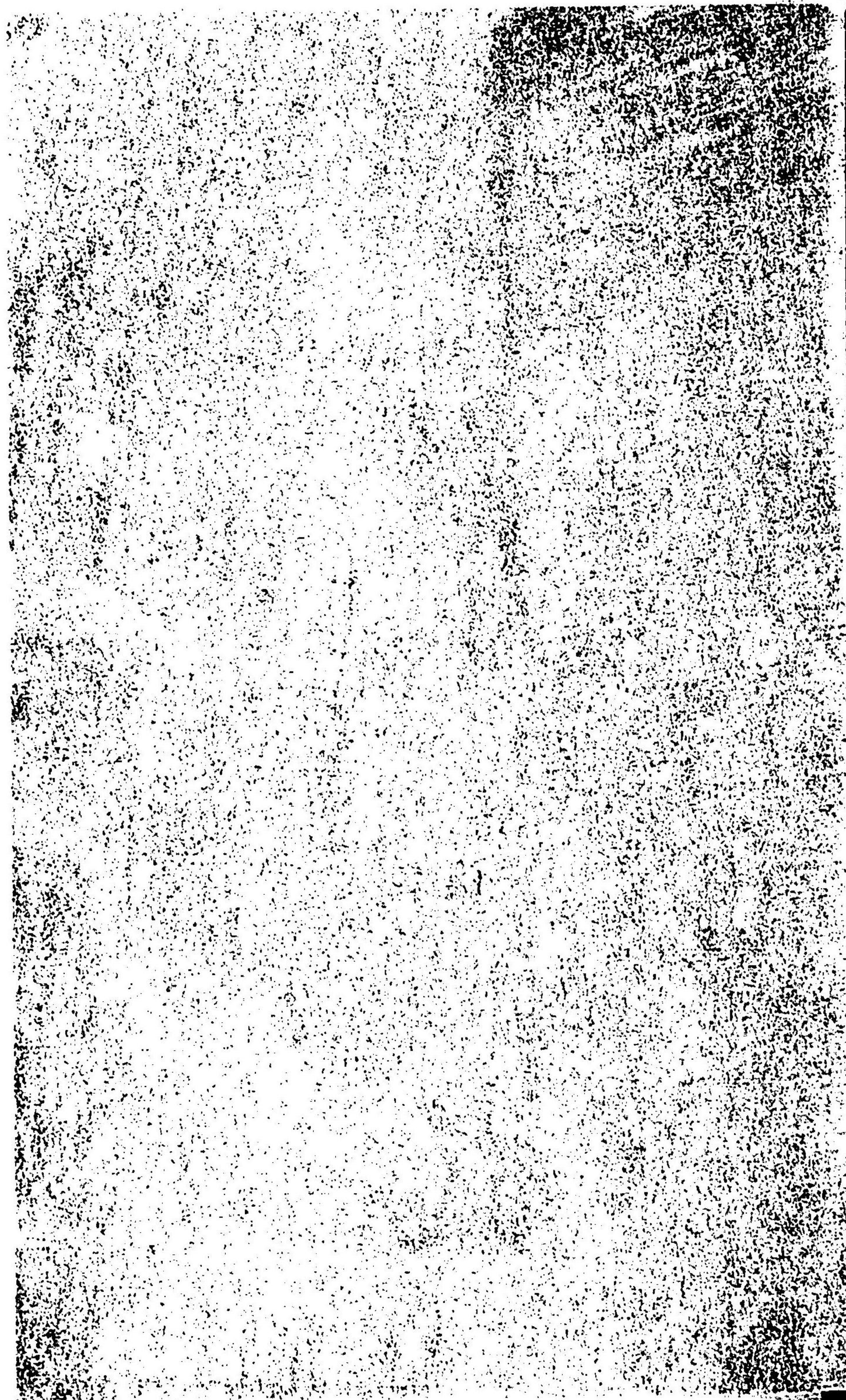
印刷者

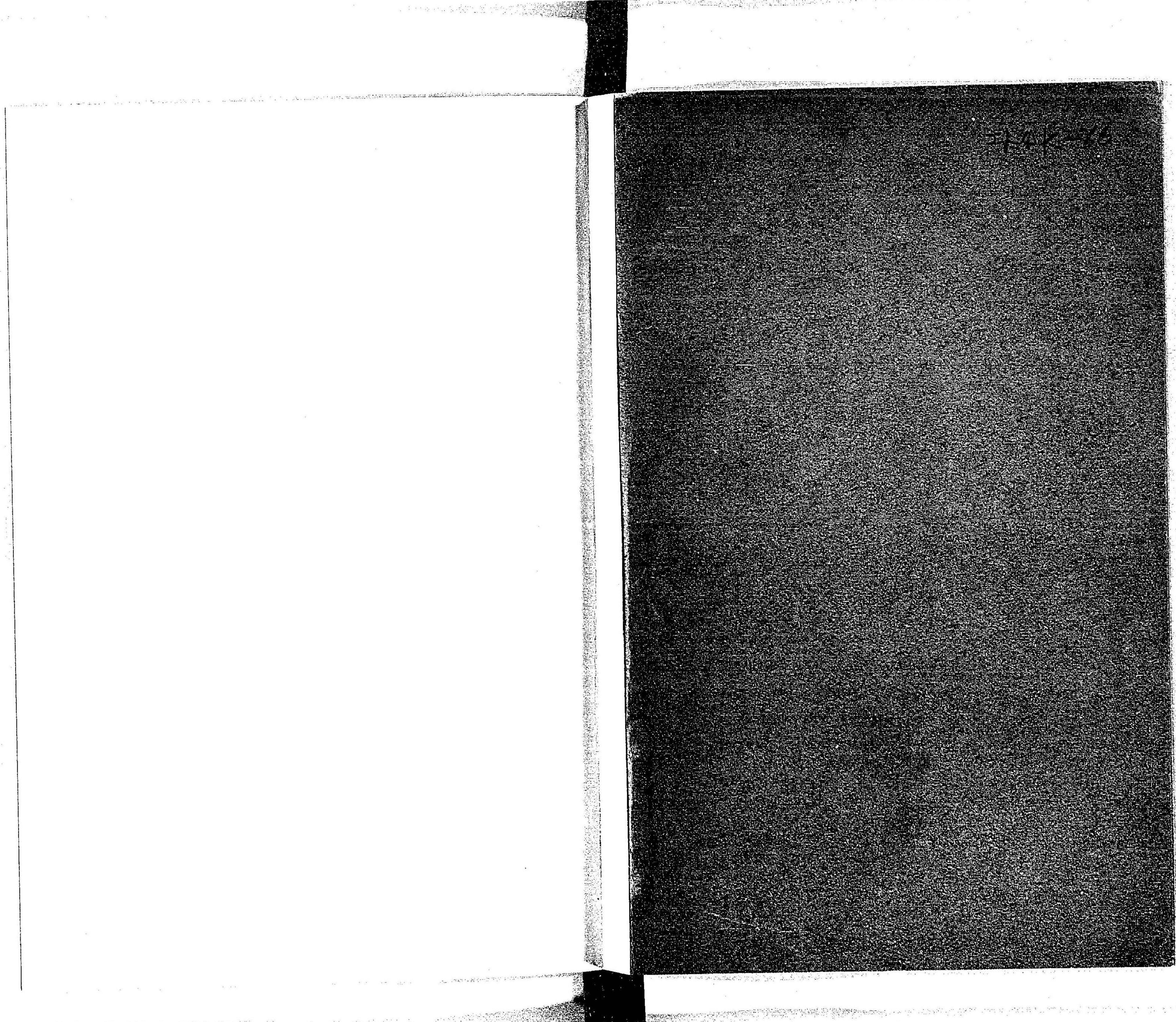
東京神田裏神保町一番地

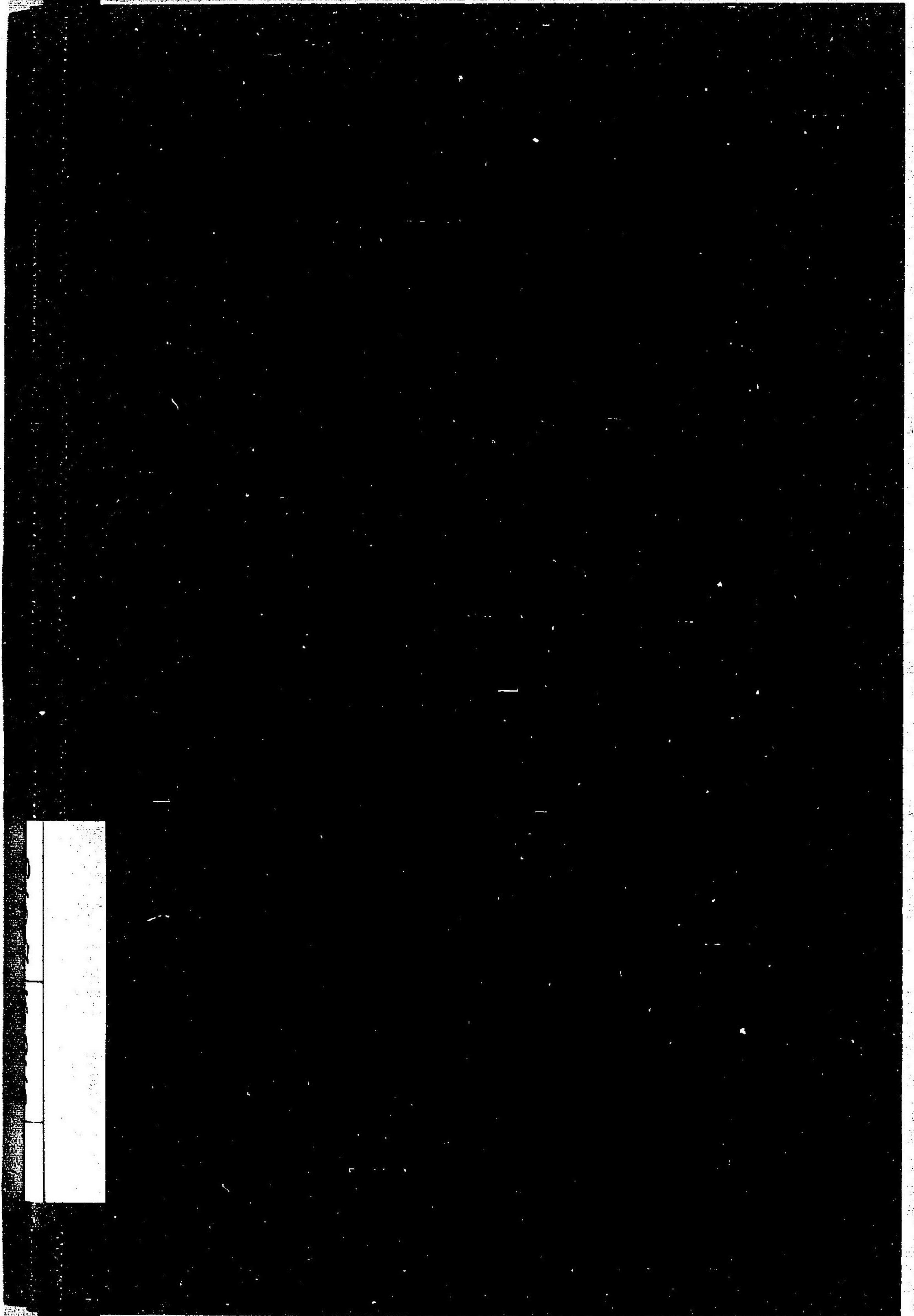
發兌書肆

敬業









Small white rectangular area, possibly a label or a small redaction, located on the left edge of the black redaction block. It contains some faint, illegible markings.

810.7
Ka811g

語学入門

川上広樹

国立国会図書館

076863-000-6

810.7-Ka811g

語学入門

川上 広樹 / 著

M21.11

DAC-0022

